



注文の多い料理店

Restaurant Wild Cats

雷羽

Ground Top  
近代小説シリーズ

# 注文の多い料理店

雷羽 著  
Ground Top小説

## 「注文の多い料理店」

このファイルはサンプルです。  
冒頭2ページが試し読みいただけます。  
その他、内容が省略されていますのでご了承ください。  
転載・配布は禁止されています。

## 注文の多い料理店

二人の、若い紳士が山奥を歩いていました。イギリス調の少し兵隊のような格好、その足元では真っ白な犬が二匹、舌を出し、はっはっと言いながら二人に追いこされたり追い抜いたりしています。時々見上げるようにして、草の生い茂る道も無いところを進んでいました。

「全く、この山を見てみろ、何にもいやしない。もう何でもいい、この猟銃を轟かせてみたいねえ。」

「鹿でも居ればすぐにお見舞いしてやるさ、そう、腹なんか二、三発くらい打ち込んでやったらさぞかしスッキリするだろうな。鹿の倒れる様が目に浮かぶようだ。」

深い森、山々があたりを覆い、視界は見渡す限りの木の群れが広がっていました。ざわざわと風がそよぐ度に言い知れぬ神性を漂わせます。人間には気付かないだけなのかもしれないほどでした。

二人は何も彼らだけでこの山の奥へ来た訳ではありませんでした。案内役に頼んだ男がいつの間にか居なくなってしまう、もう当てにしないと二人でこそこんな山の奥まで来たのでした。勿論、土地勘など無いから、道には十分気をつけているつもりだったのです――。

そうこうしている内に、前を揚々と走っていた犬がぐったりとしているではありませんか。二人が駆け寄ってみると、山の気に当てられたらしく、二匹とも口から泡を吹いて倒れていました。

「さて、困った。」

「二千四百円も損をした。」

「何を言ってるんだ、俺は二千八百円だぞ。」

犬を見下ろしながら、虫の悪そうな顔を浮かべました。ざわっと風が吹きました。

紳士が肩を震わせて、外套の襟を寄せますと、身を縮こめました。

「なあ、俺はそろそろ帰ろうかと思ってる。犬のこの通り、日暮れも近い。寒くなったら大変だろう。」

「ああ。この辺で帰るのが賢明だ。ここへ入る前の宿に山鳥が売っていただろう、あれをいくらか買って帰ればいい。」

「兎もあつた、俺はそれでも買って帰ろう。」

歩き出そうと一步を踏み出してから、二人は途方に暮れました。自分たちはどちらから来たのか、数分前に歩いてきた方向すら、わからないほど道という道はありません。

山の狭間、風のように吹く風は、乾いた葉をかさかさとして鳴らし、木をぎいぎいと軋ませます。足元の草はまるで二人が間違った方角へ向かっているのを笑っているように思えるのでした。

「ああ、腹が減った。昼から何も食べていないのに、こんなに歩くとはい。」

「俺もだ、足がぐらぐらするよ。なるべく早く降りられるといいな。」

ざざざ、からんからん、ひゅう、虚しい音が響くたびに、ただ怖さと恐ろしさが襲ってきました。

「腹が減って死にそうだ。」

「早く山を下りて、鱈腹食べたいね。」

ずんずんと黒さを増していく森に、風の音と、二人の足音が響きます。

「おや。」

紳士が後ろを見返りますと、今まであったのでしょうか、一軒家がポツンと立っていました。しっかりとした洋館のような佇まい、そこだけまるで別世界のようにでした。戸の所には文字が書かれていました。

——西洋料理店「山猫軒」 RESTAURANT WILD CAT HOUSE

「なんだあれは。山奥だと思っていたのに、いつの間にか随分下ってきていたようだ。腹も好いているから入ってみようか。」

「いやいや不思議な。レストランということは、食事も出来るということか。」

「たぶんな。見ろ、看板がかかっている。何はともあれ入ってみよう。」

二人が近づくにつれて、レストランの店構えは立派になっていきました。ガラスの窓、質のいい煉瓦を使った屋根、漆喰も漏らすこと無くしっかり塗られているのでした。まるで数日前に出来たかのような綺麗さでした。そしてドアにはこう書かれていました。

——どなたもどうぞご遠慮なくお入りください。

「見ろ、世の中は全く、上手くできてる。今までの不運がまるで嘘のようだ、腹が空いたとほざけば、上手いことレストランにありつけたじゃないか。」

「きっとこの山で迷った猟師のために親切に作られたレストランなのだろう。」

二人は喜んでドアを開けると、廊下が続いていました。ガラス戸が一枚、そこには金の文字で文が書かれていました。

——遅いお方、若いお方は大歓迎でございます。

「これはこれは。大歓迎だと。どちらもある俺たちは上客かもしれないぞ。」

「先へ行こうか。」

ペンキのおいが漂う廊下を進んでいきますと、水色のドアに突き当たりました。

「不思議な家だ、どうしてドアがこんなにあるんだ。」

「ロシアでは寒さを防ぐ為に幾重にもドアを設けるのさ、きっとここはロシア式なんだ。」

水色のドアに、黄色い文字でこう書かれていました。

——当店は、注文の多い料理店でございます。どうか予めご承知くださいませ。

「凝ってるね。東京のレストランにもこんな立派なものは少ない。人気があるのかもしれないな。」

そんなことを言いながらドアを開けますと、ドアの内側にはこう書いてありました。

——ご注文はすこぶる多いと存じますが、なにとぞご辛抱くださいませ。

「うん、何を言いたいんだ。」

「つまりだ、注文が多くて、支度に手間取り料理を出すのが遅くなるが、そこは我慢してくれということじゃないのか。」

「なるほど。」

## 個人販売元

Ground Top <http://groundtop.sakura.ne.jp/>  
雷 羽 [banji.jp@gmail.com](mailto:banji.jp@gmail.com)

Printed in Tokyo, Japan. All rights reserved.

## 商品情報

販売価格：非売品

管理コード：df-492631wbvp\_s

取扱種別：電子取引

発 行：2012年10月

販売者：雷羽

作成者：雷羽

販売元：Ground Top (<http://groundtop.sakura.ne.jp/>)

作成元：Ground Top (<http://groundtop.sakura.ne.jp/>)

連絡先：[banji.jp@gmail.com](mailto:banji.jp@gmail.com)

著作権：Copyright (C) Ground Top by LeiYu.

ZIP内容：

- ・ chuumonnooairyouriten\_pdf.pdf